

愛媛県北条市における果樹栽培の展開と地域的変遷

窪田 重治

1. はじめに

北条市は県都松山市に隣接し、瀬戸内海の^{いつきなだ}斎灘に面する面積102.33km²・人口2.9万人（2000年）の臨海小田園都市である。産業別人口構成は、第一次産業人口率21.9%、第二・三次産業が78.1%を占め、松山市の学園・住宅衛星都市化が進展している。

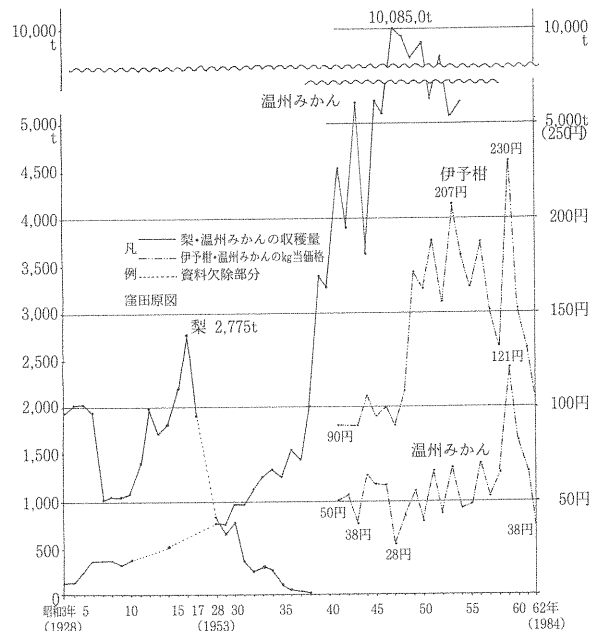
北条市の農業部門の主幹作物は果樹である。^{あさなみ}浅海地区は中予における果樹栽培の先進地で、浅海梨の特産地を形成した。窪田は1991年『伊予史談』282号 pp30～43・1992年『伊予史談』286号 pp15～27に「浅海梨の盛衰」と「柑橘産地の形成」について執筆している。

本稿は1941（昭和16）年をピークに衰退した梨から温州みかんへの産地再編の過程、さらに1973（昭和48）年の温州みかん価格の暴落を契機に展開した新種『宮内伊予柑』への品種更新による宮内伊予柑単一産地形成のプロセスを、地域変遷史的に考察する。

2. 梨の衰退と温州みかんの導入

1888（明治21）年、^{かざはや}風早郡¹の果樹生産（愛媛県果樹園芸史 1968, p30）は、「^{だいたい}橙4,000貫、梨3,400貫、柿6,340貫、枇杷260貫、みかん2石」である。1915（大正4）年には、北条市域で梨83ha、温州みかん8ha、1931（昭和6）年には梨204ha、温州みかん78haになった（村上 1967 pp429～431）。

北条市の果樹栽培は、旧浅海村を中心に隣接刺激で旧難波村に拡がり、その殆んどが梨園であった（第1図）。1966（昭和41）年北条市は、梨4haに対し、温州みかん515ha、夏柑20ha・雑柑38ha、柑橘類計573haになった。浅海梨も1929（昭和4）年までが最盛期で1942（昭和17）年の2,775tの生産をピークに衰退し²、その後は温州みかん産地に転換していった（第2図）。



第2図 北条市浅海地区（旧浅海村）の梨と温州みかんの収穫量と柑橘類の価格変化

資料：愛媛県（1984）『愛媛県史』地誌Ⅱ 中予 p506および愛媛県園芸農蚕課 果樹統計資料により、窪田重治作成

北条市は柑橘産地としては新興地であった。それは明治中期から浅海村味栗の尾上又次郎（1872-1960）によって、梨の栽培が普及し、浅海を中心に明治・大正・昭和初期にかけて梨の全国的産地に発展していたからである。

尾上又次郎は1895（明治28）年味栗の番所ヶ平5haを開墾し^{りんご}苹果3.5ha・梨1ha・柑橘類0.5haを植付け『成果園』と命名した。1901（明治34）年山林10haを購入し、1902～1904年に開墾した。1903（明治36）年持田の三好保徳（三果園）から5,000本の苗木を購入し8haに定植して梨の本格的な大規模経営に着手した。

浅海で柑橘栽培を始めたのも尾上又次郎で、1895（明治28）年味栗の旧道下に夏柑を植えた。彼は柑橘



第1図 浅海梨園の分布(温泉郡浅海村・難波村・正岡村=現北条市)

地理調査所 明治36年測図 昭和3年修正測図5万分の1地形図「松山北部」・「今治西部」図幅に、窪田重治が果樹園の分布を作図

産地形成の創始者である(写真1・2・3)。尾上又次郎・忽那実太郎・原田佐吉は、労力配分を考慮して、1907(明治40)年温州みかんの苗木を大長村(広島県豊町)大亀吉之丞から取り寄せ、2~3ha栽培した。大正初期より結実し始め、土地の仲買人の手を経て、三津浜の商人の手に渡っていった(村上1951 p72~

73)。

明治末期には片山の重松市太郎、善応寺の田中寛太郎、高山の石井安太郎、下難波の川端登・川端鷹次郎らが植えていた(村上1967 pp429~431)。

立岩の岩田鷹太郎(1883~1943)は、伊予果物同業組合の第二代組合長を勤めた人で『香梨園』を経営し



写真1. JR浅海駅前にて1970(昭和45)年5月30日に
建立された尾上又次郎・忽那小太郎翁の頌徳碑
1990年10月28日 窪田重治撮影

梨の大栽培家として斯界に光った。

粟井・河野地区の果樹栽培の本格的取組は、浅海・難波地区に比べると遅かった。それは養蚕の奨励と換金作物の葉たばこ栽培が盛んであった関係による(写真4)。

1907(明治40)年北米視察から帰国した西岡種憲(1870~1948)が風早郡別府村柳原(現北条市)の出身で、彼が伊予郡原町村(現砥部町)に、1909(明治42)年尾州系温州の『旭向園』(3.2ha)を開いて成功したので、皆が真似て開墾に着手したという(村上1967 pp429~431)。(第1表参照)

粟井地区客の「蜜柑先覚者之碑」(写真5)には「これらの人々は北条市客地区における蜜柑栽培の先覚者たり。既に大正初年蜜柑に将来性あるを予見し、これを導入自らも率先して植栽地に範を示す。爾来六十余年、蜜柑栽培は盛衰を経ながらも、先覚の眼に違ふことなく、順次他に波及し、今日の隆昌を見るに至

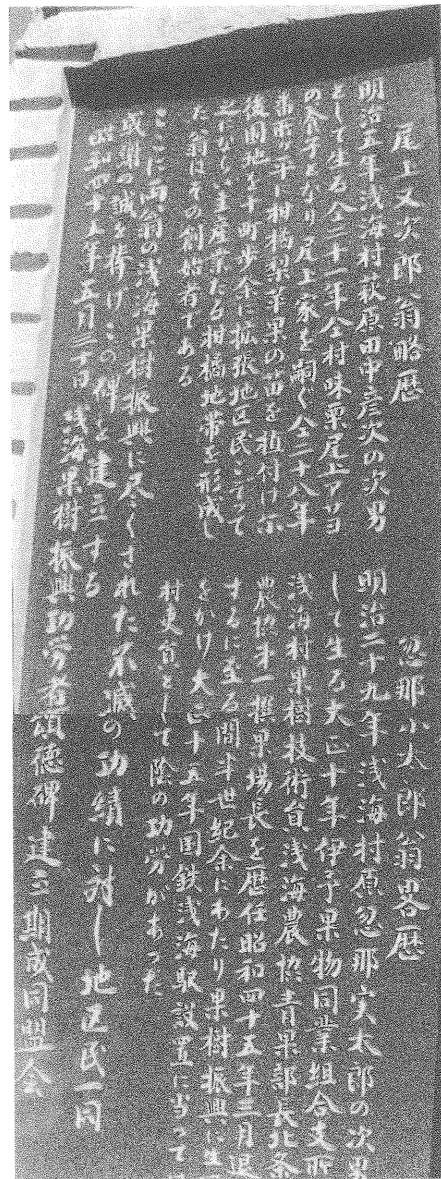


写真2. 頌徳碑文

(注) 村上節太郎は「尾上氏の年々1万円以上の収入も大正10年まで、三津の肥料商遠藤義三郎に借金ができた。大正13年の暮には成果園を譲って内田実氏を頼って淋しく上京してしまった。村人は尾上氏の頌功記念碑の石まで準備していたのに残念である」(村上1951 p84)と記している。

北条市JR浅海駅前にて 1990年10月28日 窪田重治撮影

る。かくて蜜柑なくば農業なく、農業なくんば経済なし状態を現出せり。これを先駆者の賜なりと謝し、茲に名を留め称うものなり。」(撰文桐野忠兵衛)と刻まれている。



写真3. 北条市鴻之坂から見た浅海地区味栗の宮内伊予柑の単一栽培景観

(注) 1895 (明治28) 年尾上又次郎が味栗の番所ヶ平に成果園を開いて果樹栽培を開始した浅海梨 (赤梨) の発祥地

1990年10月28日 窪田重治撮影



写真4. 先駆的商品作物の葉たばこの乾燥室が改造されて温州みかん・宮内伊予柑の貯蔵庫になった。

—北条市粟井地区客— 1990年11月23日 窪田重治撮影



写真5. 北条市粟井地区客の蜜柑先覚者之碑 1973 (昭和48) 年建立 題字白石春樹愛媛県知事

(注) 碑面に樋野秀盛・三好林次郎・橋亀太郎・樋野菊次・則内吉春・堤専太郎・樋野平太郎・高智惣兵衛の八氏の氏名が刻まれ、発起人高智繁雄、世話人代表三好俊雄が建立した。

1990年11月23日 窪田重治撮影

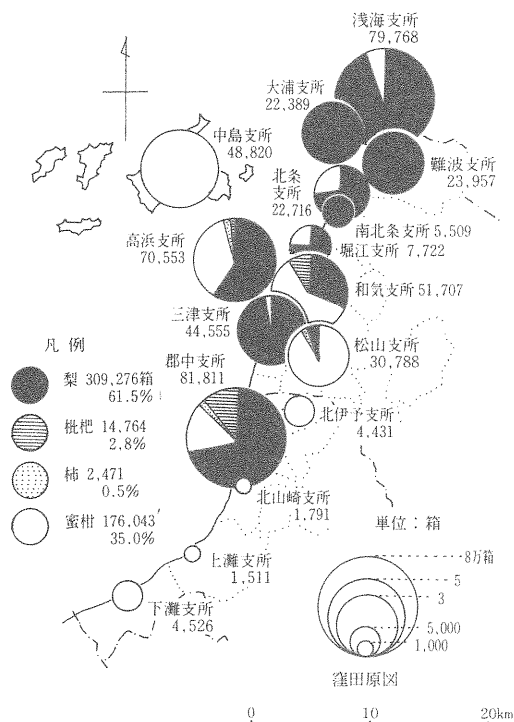
第1表 北条市における果樹の種類別栽培戸数・面積—1920 (大正9) 年— (反=991.7㎡)

町村	梨		温州		ネーブル		雑柑		枇杷		合計		
	戸	反歩	戸	反歩	戸	反歩	戸	反歩	戸	反歩	戸	反歩	
浅海	191	1,111.310	54	100.000	9	17.000	3	1.300	1	500	258	1,230.110	52.7
	74.0%	90.3	20.9	8.1	3.5	1.4	1.2	0.1			100.0	100.0	
難波	192	757.002	20	29.820	1	4.000					213	790.822	33.9
	90.1	95.7	9.4	3.8		0.5					100.0	100.0	
立岩	23	84.103	19	28.910	1	4.000					43	117.013	5.0
	53.5	71.9	44.2	24.7		3.4					100	100.0	
正岡	10	14.815	4	9.100			3	3.405			17	27.320	1.2
	58.8	54.2	23.5	33.3			17.7	12.5			100	100.0	
北条													
河野	16	99.000	9	26.000							25	125.000	5.4
	64.0	79.2	36	20.8							100	100	
粟井	10	24.406	13	18.602							23	43.008	1.8
	43.5	56.7	56.5	43.3							100	100	
合計 (北条市)	442	2,090.636	119	212.432	11	25.000	6	4.705	1	500	579	2,333.273	100.0
	76.3%	89.6	20.6	9.1	1.9	1.1	1.0	0.2			100	100	

資料：愛媛県温泉郡役所 1923 (大正12) 年『温泉郡勢』により、窪田重治作成

3. 温州みかんの販路開拓と出荷市場

1930（昭和5）年伊予果物同業組合〔1913年創立・管内は松山市・温泉郡（興居島村を除く）・伊予郡〕管内の取扱果実の主体は、温州みかん（40.5%）と梨（36.4%）が占めていた。1931年の組合管内支所別出荷割合を見ると（第3図）、中島^{かみなだ}と上灘・下灘（現双海町）の柑橘専作と、松山平野山麓の柑橘主梨副の複合栽培、北温の梨主柑橘副の地帯に分化している。



第3図 1931（昭和6）年伊予果物同業組合支所別の果実取扱数量の分布

資料：伊予果物同業組合(1932)『伊予のくだもの』pp61～62により窪田重治作成

温州みかんの栽培面積の増加が著しくなると、梨を凌駕する勢いを示してくると、伊予果物同業組合も梨の販路のみに腐心していた販売斡旋事業の転換を迫られてきた。そこで、柑橘の市場開拓に努め、広島・和歌山・静岡・神奈川などの大産地の地盤に割込み、東京市場の開拓に1928（昭和3）年1万円の販売斡旋費を計上した（伊予果物同業組合 1932 pp10～11）。

北条市の梨は、出荷体制が確立していて、値崩れの元凶となっていた山売³⁾の習慣は薄い³⁾が、温州みかん・伊予柑・ネーブルについては、山売の習慣が根強く残っ



写真6. 北条市浅海原の日之出組の選果場
(浅海梨・温州みかんの出荷倉庫)

(注) 農閑期には臨時劇場となり農村娯楽の殿堂にもなった。1990年10月28日 窪田重治撮影

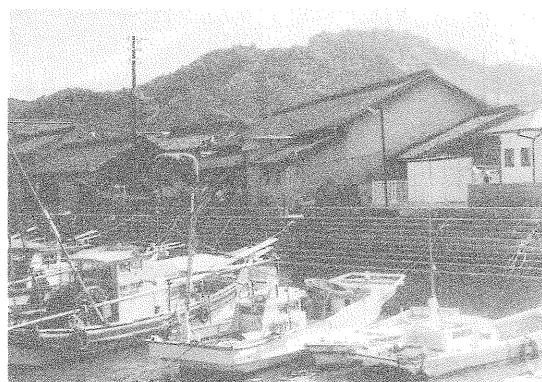


写真7. 浅海漁港と日之出組の共選倉庫
—北条市浅海原—

(注) 梨の全盛期には帆船・発動機船で北九州・中国を主販路に積み出した。浅海駅の開設で鉄道輸送が主になる。1990年10月28日 窪田重治撮影

ている（第2表）。

1929（昭和4）年温州みかんの共同選果場を建設し日之出・共和・昭和・丸正・河野・粟井の小組合単位で共同出荷を始め、浅海・北条支所管内でも温州みかんの産地形成がすすんだ（第3表 写真6・7）。

1932（昭和7）年、伊予果物同業組合は「柑橘は東京・京阪神を主販路とし、九州・朝鮮・大連を補助販路とし、その他を試売地区」とした。（伊予果物同業組合 1932 p2）。特に1937（昭和12）年の浅海・北条支所別の出荷状況は第4表のように、満州（現中国東北地区）・朝鮮の大陸市場が6割弱を占めた。伊予果物同業組合管内でもその依存率は最も高い主市場となった。

第2表 伊予果物同業組合の小組合別出荷量と山売個数（北条市関係）－1935（昭和10）年－

小組合 地区	日之出 浅海村	常盤 難波村大浦	共和 難波村下難波	昭和 中通・上難波・庄	丸立 立岩村	丸正 正岡村	河野 河野村	粟井 粟井村	北条 北条町
枇杷	箱	箱	箱	箱	24箱	箱	箱	箱	箱
梨	66,593	13,274	14,550	14,540	930	1,451	334		
桃・ブドウ 柿 早生温州 温州 ネーブル 伊予柑	72	973			7				
合計	66,665	14,247	14,652	14,540	961	1,451	334		
山売 温州 ネーブル 伊予柑 夏柑 梨 ブドウ	651 154 200 205	19 12	254 52 409		233 453	12	163 30	35 40	300
合計	1,210	31	715		686	12	193	75	300

資料：伊予果物同業組合 1936（昭和11）年 第9回生産販売連合協議会書類・昭和10年産販売斡旋事業成績概要 p29・p40により、窪田重治作成

第3表 北条市における伊予同業組合小組合と組合員数－1930（昭和5）年

小組合名	区域	組合員数	主要生産果樹
日之出	温泉郡浅海村	178	梨・柑橘
常盤	難波村大浦	52	梨
共和	〃下難波	101	梨・柑橘
昭和	難波村中通 上難波 庄	178	梨
丸立	立岩村	58	柑橘・梨
丸正	正岡村	61	柑橘・梨
河野	河野村	58	柑橘
粟井	粟井村	55	柑橘

資料：伊予果物同業組合 1932（昭和7）年『伊予くだもの』pp 36～37により、窪田重治作成

輸送方法も帆船から発動船・汽船，さらに1926（大正15）年，国鉄予讃線が菊間から北条まで開通し，1927（昭和2）年浅海駅が開設されてから第5表のように多様化した。

伊予果物同業組合は，大連に駐在員桜木寛一郎を派遣し，彼の努力によって対満移出が飛躍的に伸びていった。

1933（昭和8）年，大連市場駐在辻山詳行（伊予果物同業組合 1933 pp10～11）は，「満州国トシテ，日・月・特ノ如キ大玉ハ一部日本人以外ニハ需要ナク，満

第4表 1937（昭和12）年の伊予果物同業組合支所別温州みかんの市場別出荷割合（北条市関係のみ）

市場	支所		
	浅海	北条	伊予果物同業組合管内計
東京	5,293 ^箱	10,613 ^箱	396,654 ^箱
	22.4%	29.2%	46.1%
大阪		481	103,366
		1.4	12.0
プサン 釜山	2,259	2,268	26,158
	9.6	6.2	3.0
ソウル 京城	2,290	2,725	13,600
	9.7	7.5	1.6
ターリエン 大連	3,941	10,287	123,809
	16.7	28.3	14.4
シェンヤン 奉天 (瀋陽)	4,530	5,785	37,817
	19.1	15.9	4.4
指定外	5,318	4,179	57,169
	22.5	11.5	6.6
合計	23,631	36,338	その他共合計 860,583
	100.0	100.0	100.0

資料：伊予果物同業組合 1938（昭和13）年 第11回生産販売連合協議会書類p14～16により、窪田重治作成
(注) 単位：箱 (7貫目 26.25kg入)

第5表 北条市内の支所別運送機関の利用状況 -1937(昭和12)年- 単位:箱 (梨5貫目入, 温州みかん7貫目入)
18.75kg 26.25kg

支所	汽 車		汽 船		発 動 船		汽 車	汽 船	発動船
	梨	柑 橘	梨	柑 橘	梨	柑 橘			
浅海	13,306	6,133	—	17,050	68,500	2,980	19%	17%	64%
大浦	—	—	—	—	18,920	—	—	—	100.0
難波	1,054	—	—	—	16,176	—	6	—	94.0
北条	—	—	547	—	2,970	—	—	15.5	84.5
南北条	—	11,519	1,788	26,233	—	12,248	24	50	26

資料:伊予果物同業組合 1938(昭和13)年 第11回生産販連合協議会書類により,窪田重治作成

州国人大衆向トシテハ、天以下ノ小玉物ヲ大量ニ要求スルモノナリ……。 (中略) 満州国ノ如キ大消費地ガ伊予物ノ進出ヲ期待スル折柄多少ノ犠牲ヲ忍ビテモ本年度ハ大量出荷ヲ為シ、新販路ノ開拓ヲ希望ス……。』と伝えてきた。

大連中央市場(伊予果物同業組合 1936 pp16~17)は「貴組合ノ大連市場ヘノ配給ハ総数量ノ一割ニ達セサル状況ニテ、南予地方ノ真穴組合・川上村組合一組合ノ出荷量ニ等シキ状態ニテ、大連市場ニ於ケル貴組合ノ成果ヲ圧倒的ナラシムルニハ上場数ノ少量ヲ甚ダ遺憾ト被存候……。』と出荷量の増大を希求し、大陸市場の販路拡大は極めて有望であった。

ところが、1937(昭和12)年7月7日の日中戦争の勃発で、果樹農業は暗黒の時代に入ってしまった。戦争の影響を直に受けた大陸市場の惨状は「支那事変勃発ノタメ定期輸送船ノ臨時徴発欠航、軍需品ノ輸送関係等ニテ果物ノ積荷制限ヲ受け、最終マデニ予定ノ数量ノデキザリシヲ遺憾トス。

引続き輸送機関円滑ヲ欠キ大連行直送ヲ計画シ、十二月月上旬頃ヨリ発動船及汽船ニ依リ下関中継又ハ釜山直行船ヲ利用シテ、満州奥地行幹旋ヲ開始シタルニ、関釜間ノ輸送船ノ軍需徴発、釜山-奥地間ノ軍需輸送ニヨル貨車不足ノ為、果物ノ滞貨輻輳甚シク為ニ奥地指定ニ到着ノ時期ハ腐敗凍結甚シク終始市価不振。。

朝鮮市場ハ伊予蜜柑ノ認識逐年昂メラレ需要益々増加傾向ニアルヲ以テ本年新シク釜山ニ駐在員ヲ派遣シ中継監督其他幹旋事業ニ善処セシメタルニ、大連出荷ノ不円滑ニ基キ各産地ハ競ッテ奥地輸送ヲ計画シタル為、釜山ハ全国的中継地トナリ、果物ノ滞貨ハ遂日増加ヲ示シ、軍需輸送ノ関係ニテ貨車不足ニ依リテ配給ニ支障ヲ来シ為ニ、管下生産果物モ其影響甚シク従来ノ声価モ失シ……。』(伊予果物同業組合 1938 p5)の状態になり、先人の築いてきた努力も水泡にきした。

戦時体制の強化とともに、1913(大正2)年以来果

物市場開拓に成果を發揮してきた伊予果物同業組合(松山市大手町)も、戦時統制で1942(昭和17)年解散した。1944年には果樹の2割伐採令で、果樹園は甘藷畑になり、荒廃園が拡まった。

4. 温州みかん栽培の本格的展開

1952(昭和27)年の北条市の土地利用は、果樹の先進地浅海でも果樹作率30%で、他地区は主穀作物が8~9割を占め、果樹農業の地位は低かった(第6表)。

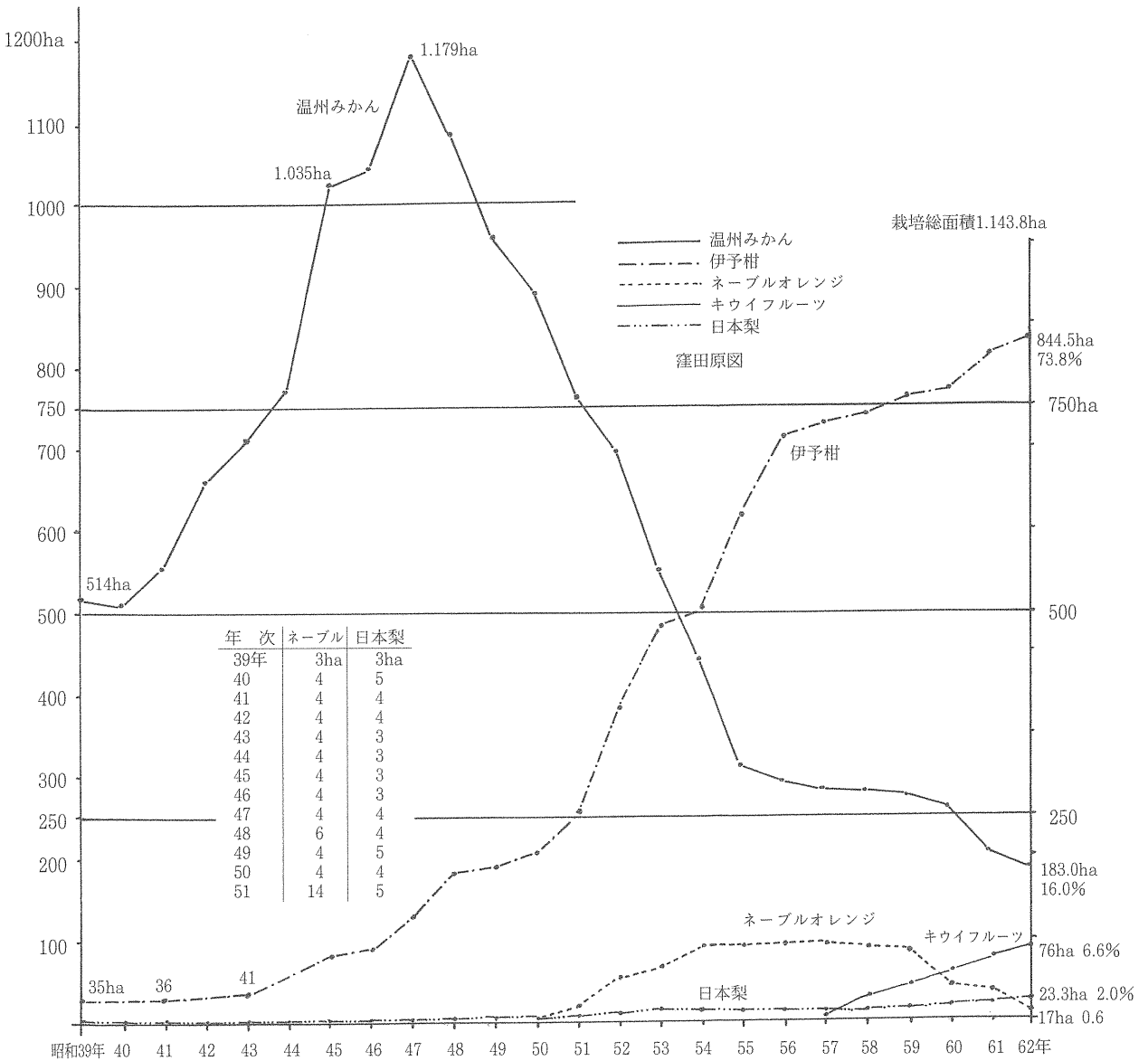
北条市の温州みかんは、1958(昭和33)年163ha、

第6表 北条市の地区別土地利用状況(作付率)
-1952(昭和27)年- (反=991.7㎡)

地区	浅海	北条	河野	粟井	立岩
事項					
作付面積(反)	3,519	12,409	6,128	5,132	3,475
耕地利用率	147.5	156.5	186.8	172.2	171.6
穀類(%)	51.1	91.1	80.9	79.2	80.0
豆類(%)	1.4	1.2	3.7	2.8	3.9
いも類(%)	13.6	3.0	3.9	5.1	4.8
蔬菜(%)	2.2	2.1	4.5	4.9	3.1
特用作物(%)	0.08	0.6	2.2	2.2	4.3
果樹(%)	30.2	1.7	3.3	5.1	2.8

(注) 難波村・正岡村は昭和26年北条町に合併した。
資料:愛媛県(1954)愛媛県農業振興計画書 第1次・愛媛県農村経済研究所報 第12号により窪田重治作成

収穫量4,583t, 夏柑5ha, 収穫量5t, 伊予柑14ha 収穫量256tであった。それが、1964(昭和39)年温州みかん514ha, 1972(昭和47)年には1,179haに達した(第4図)。



第4図 北条市の主要果樹栽培面積の変化

資料：愛媛県農林水産部園芸農蚕課『果樹統計資料』により、窪田重治作成

こうした温州みかん栽培の増加現象について麻野尚延（1985・p30）は「戦後みかんの最好況年1961（昭和36）年1日当たり家族労働報酬は1,914円⁴⁾、10a当り所得16万5,854円に達し、農業基本法という自立経営、他産業従事者の所得54万1,608円と均衡するためには、僅かに32.7aあれば足りたのである。

農業基本法・果樹農業振興法の政策的裏付もあってみかんは急激に増大した。先ず、いも・麦の普通畑にみかんが植付られ、続いて桃・枇杷・梨などの夏果実が切替えられた。

さらに、山林の大規模な開墾が行われ、遂にはみかんが水田にまでおりて、みかんの単一耕作が進んだ。1964（昭和39）年みかんの生産量100万t時代に入り価格低迷に見舞われたが、生産は抑制するどころか自立経営規模の上昇によって、かえって規模拡大がつけられた。」という（第7表）。

『北条市誌』（1981 p549）は、「1960（昭和35）年ころから個人の開墾でもブルドーザーが盛んに導入されるようになり、1965年頃には構造改善事業・パイロット事業などの団体営のものも実施され始め、山林

第7表 北条市の地区別の経営規模別農家戸数—1985（昭和60）年—（単位：戸）

地 区	合 計	例外規定	経営規模別農家戸数									
			0.3ha 未満	0.3— 0.5	0.5— 1.0	1.0— 1.5	1.5— 2.0	2.0— 2.5	2.5— 3.0	3.0— 5.0	5.0以上	
北条市計	2,583戸	7	756	505	685	313	168	71	48	28	2	
	100%		29.3	19.5	26.5	12.1	6.5	2.7	1.9	1.1		
浅 海	272戸	1	29	28	73	49	39	21	20	12	—	
	100%		10.7	10.3	26.8	18.0	14.3	7.7	7.3	4.4		
立 岩	344戸	3	92	77	92	39	22	10	5	3	1	
	100%		26.7	22.4	26.7	11.3	6.4	2.9	1.5	0.9		
難 波	388戸	—	80	69	128	68	25	10	6	2	—	
	100%		20.6	17.8	33.0	17.5	6.4	2.6	1.5	0.5		
正 岡	394戸	2	129	101	112	27	16	5	1	—	1	
	100%		32.7	25.6	28.4	6.8	4.1	1.3				
北 条	181戸	—	93	37	32	15	3	—	—	1	—	
	100%		51.4	20.4	17.7	8.3	1.7					
河 野	511戸	—	186	11.5	134	49	19	5	2	1	—	
	100%		36.4	22.5	26.2	9.6	3.7	1.0				
粟 井	493戸	1	147	78	114	66	44	20	14	9	—	
	100%		29.8	15.8	23.1	13.4	8.9	4.0	2.8	1.8		

資料：農林水産省（1986）1985年農業センサス 第一巻 都道府県別統計書 愛媛県により，窪田重治作成

原野の樹園化が大幅にすすんだ。浅海・難波地区の梨園の転作により1975（昭和50）年に940ha、1947（昭和22）年センサスの117haに比べ約8倍に拡大された」と記している（第5図）。

このような温州みかん園の増大は，高度経済成長期の消費大衆化に伴う需要増大という市場条件を背景に，農家各階層にみかんの導入が一般化したためである。山林開墾・水田転換などによるみかん園地の拡大により，温州みかんの専作化が展開し，果樹粗生産額に占める温州みかんの割合は，1970（昭和45）年まで大凡9割を占めた（第6図）。温州みかんの未成園率が52.9%（1965）という高さが，昭和30年代のみかん

ブームによる新植園のいかに多かったかを実証している（第8表，写真8・9）。

このみかん景気は，やがて西日本各地のみかん産地化により，生産過剰が表面化し1972～73年の豊作貧乏（価格暴落1kg当り28円），さらにオイルショックによる低経済成長への移項により，消費減少と構造的過剰期に突入していった（相原 1985 p13）。

麻野（1985 p30）は「1968（昭和43）年みかん生産量200万t時代に入ると，価格暴落ゴールなき規模拡大は破綻していく。それから，みかん生産は“うまいみかん作り運動”という経営的充実を目指した。具体的には施肥と灌水の技術であったが，こうした次元

第8表 北条市の温州みかん園の栽培面積と割合の変化（1965・1985年）

地 区	昭 和 4 0 年 (1965)							昭 和 6 0 年 (1985)					
	果樹園 面積ha	温 州 み か ん				温州みか ん園率	果樹園 面積ha	温州 みかん	温州みか ん園率	その他柑橘 (伊予柑)			
		未成園	成 園	未成園率	合 計					面積ha	割合		
浅 海	234	107	127	46.1%	234	100%	100%	287	30ha	10.5%	242ha	84.3%	
立 岩	79	49	27	62.0	76	100	96.2	137	75	54.7	49	35.8	
難 波	109	60	49	56.0	109	100	100.0	174	16	9.2	153	87.9	
正 岡	38	21	15	55.3	36	100	94.7	63	5	7.9	54	85.7	
北 条	11	4	7	36.3	11	100	100.0	3	0	0	2	66.7	
河 野	63	35	25	55.5	60	100	95.2	100	22	22.0	71	71.0	
粟 井	109	57	46	55.3	103	100	94.4	277	20	7.2	236	85.2	
北条市計	643	333	296	52.9	629	100	97.8	1,041	168	16.1	807	77.5	

資料：農林省統計調査部 1965・1985年 農業センサス 38 愛媛県統計書により，窪田重治作成



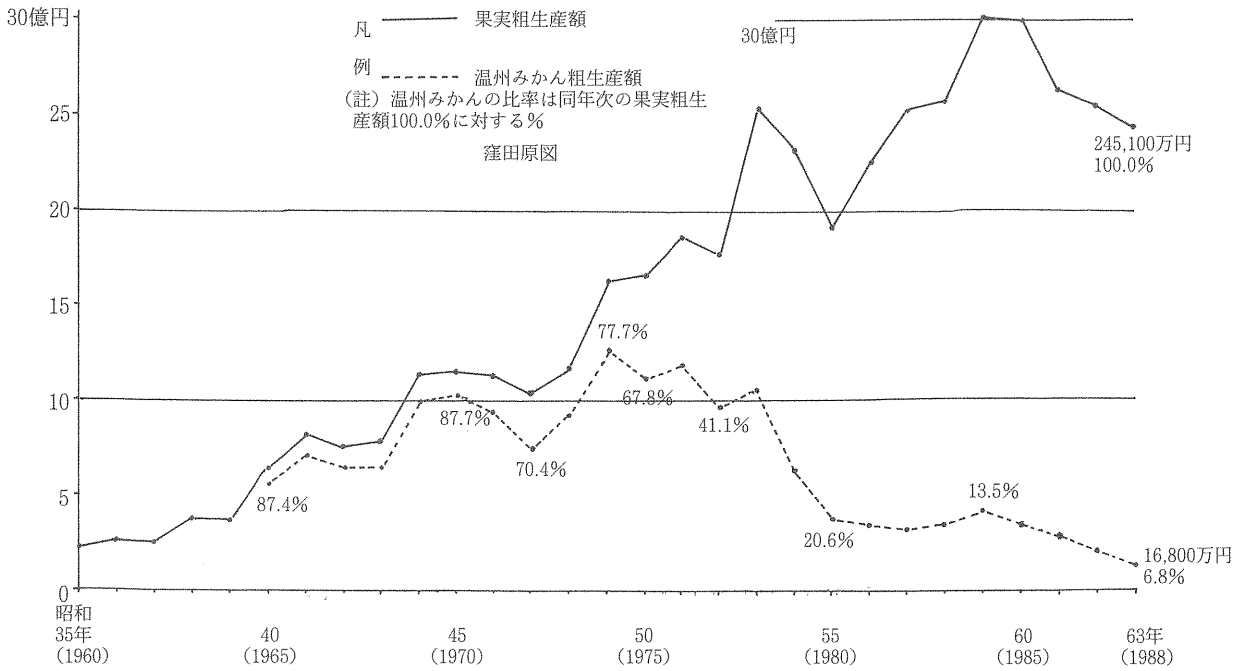
第5図 北条市の果樹園の分布

資料：国土地理院 1985（昭和60）年修正測量・1986年修正5万分の1地形図「松山北部」・「今治西部」より、窪田重治作図

の対応では決定的効果を欠き、この暴落を契機に家計費充足の在宅兼業が急増した。1972（昭和47）年300万t時代を迎え、柑橘栽培史上未曾有の大暴落によっ

て生産費の充足困難という事態に直面した。」と記している。

1973（昭和48）年2月4日の朝日新聞は、愛媛県北



第6図 北条市の果実粗生産額と温州みかん粗生産額の推移—1960(昭和35)年～1988(昭和63)年—
 資料：愛媛県農林統計協会 1990 農業粗生産額累年統計 愛媛県市町村別により，窪田重治作成

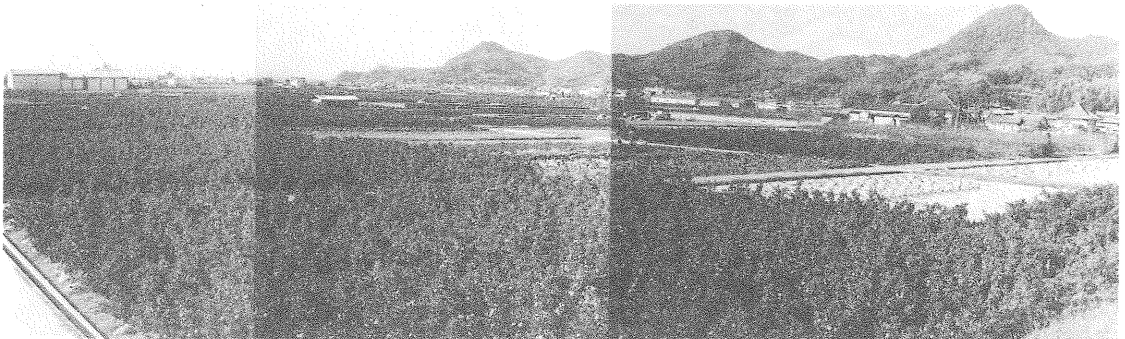


写真8 北条市庄付近の水田転換宮内伊予柑園，中央の山が腰折山(215m)．右端が恵良山(302m)
 1990年11月11日 窪田重治撮影



写真9 柑橘園地の上部限界の拡大，海拔220～240mの長井方の宮内伊予柑園。寒害防止の冷気攪拌の扇風機が設置してある。
 北条市粟井地区 1990年11月23日 窪田重治撮影

条市の豊作みかん『今や牛のエサ』という見出しで「貯蔵も限界、それに追い打ちをかけて腐敗がすすむ。愛媛県下では、みかんが牛の餌に大量放出されている。北条市浅海の田中栄さん方でも、3頭の乳牛の飼料は専らみかん、ちょっとした傷ものは選果場から無料で直行ー。これまでジュースに搾った粕しか与えなかったが、丸い大きいみかんはおいしいのか食欲は盛ん。1日3回で1頭に20kg与えているが、自由に食べさせておくと1日60kgぺろりと食べてしまうという。ただし、肉牛は脂肪に色がつくので食べさせないとか。」と報じた。

みかん価格の暴落は、農家経済に深刻な打撃を与えた。愛媛県はみかんモノカルチャーから中晩柑類の多角的経営の対応と産地再編を目指し、品種更新が他県に比べ先駆的であった。

果樹は永年作物で接木繁殖が行われる。それが高接という品種更新技術を生みだし、育成期間の短縮を可能にした(相原 1990 p2)。そこに『宮内伊予柑』⁵⁾という有望代替品種がタイムリーに出現した(写真10)。



写真10 伊予柑新品种(宮内伊予柑)誕生(1966年11月17日登録認可)
北条市庄 1990年11月11日 窪田重治撮影

5. 宮内伊予柑の導入と産地形成

普通伊予柑は松山地方に栽培される地方品種(窪田 1990 pp251~275)で、果樹統計でもその他柑橘類に含まれ、単独品種として扱われたのは1967(昭和42)年からである。北条市では1891(明治24)年西原徳太郎が「ダルマミカン」と称して、庭先に植えていた(村上 1967 p430)。

伊予柑が東京市場へ出荷されたのは1928(昭和3)

年伊予和気駅が開設されてからである(村上 1952 p 256)。伊予柑の主要産地は、和気・潮見の城北地域に限定されていた(第9表)。

温泉青果農協管内でも、昭和30年代の10か年間は、2,000 t 前後の生産量に低迷し、1958(昭和33)年から、その対策の研究と伊予柑の優良系統選抜試験を農協として継続していた(麻野 1979 p2)。

第9表 伊予果物同業組合管内の小組合・共選別伊予柑出荷量 1932(昭和7)年 単位:箱

市 町	旧町村	小組合共選	出荷量	割合	
北条市	難波	共和	—	—	6.0
		難波共	90	1.9	
		北条共	96	2.0	
	粟井	粟井	100	2.1	
松山市	堀江	親園	87	1.9	78.8
	潮見	丸汐	1,127	24.3	
		丸共	156	3.4	
	久枝	成園	1,278	27.5	
		龍雲	625	13.5	
	和気	入船	31	0.7	
		新浜	新浜	12	
	三津浜	三光	10	0.2	
	道後	道後第1	115	2.5	
		道後第2	59	1.3	
	湯山	愛園	132	2.8	
小野	達磨	16	0.3		
重信町	北吉井	吉井	1		
砥部町	原町	丸八	5	0.1	0.4
		宮内	10	0.2	
	砥部	丸砥	4	0.1	
伊予市	南伊予	戒	6	0.1	14.4
	南山崎	平和	662	14.3	
双海町	下灘	圓山	16	0.3	
合 計			4,638	100.0	

資料:伊予果物同業組合 1933年 第6回連合販売協議会議案付・昭和7年度 販売運送統計pp28~34により、窪田重治作成

北条市の伊予柑栽培面積は、1964(昭和39)年35ha 1968(昭和43)年でも41haに過ぎなかったが、その

後の宮内伊予柑ブームで1978（昭和53）年には温州みかんを圧倒して、栽培面積は逆転した（第4図参照）。

こうした宮内伊予柑の急増要因は、新品種宮内伊予柑の発見と育成によるもので、奇しくも1968（昭和43）年と1972（昭和47）年の温州みかんの価格の暴落と期をいっにしたこと、そのタイミングの良さが爆発的人気と呼んだ。宮内伊予柑を最初に導入したのは、浅海本谷の白石行実である。彼は原産地の松山市平田町の親戚から宮内伊予柑の穂木を譲り受け、接木して育成した。その優秀性を実証して、積極的に温州みかんの更新をすすめた。しかし、一般的には普通伊予柑（在来種）のイメージが強く、批判的で冷ややかであった。

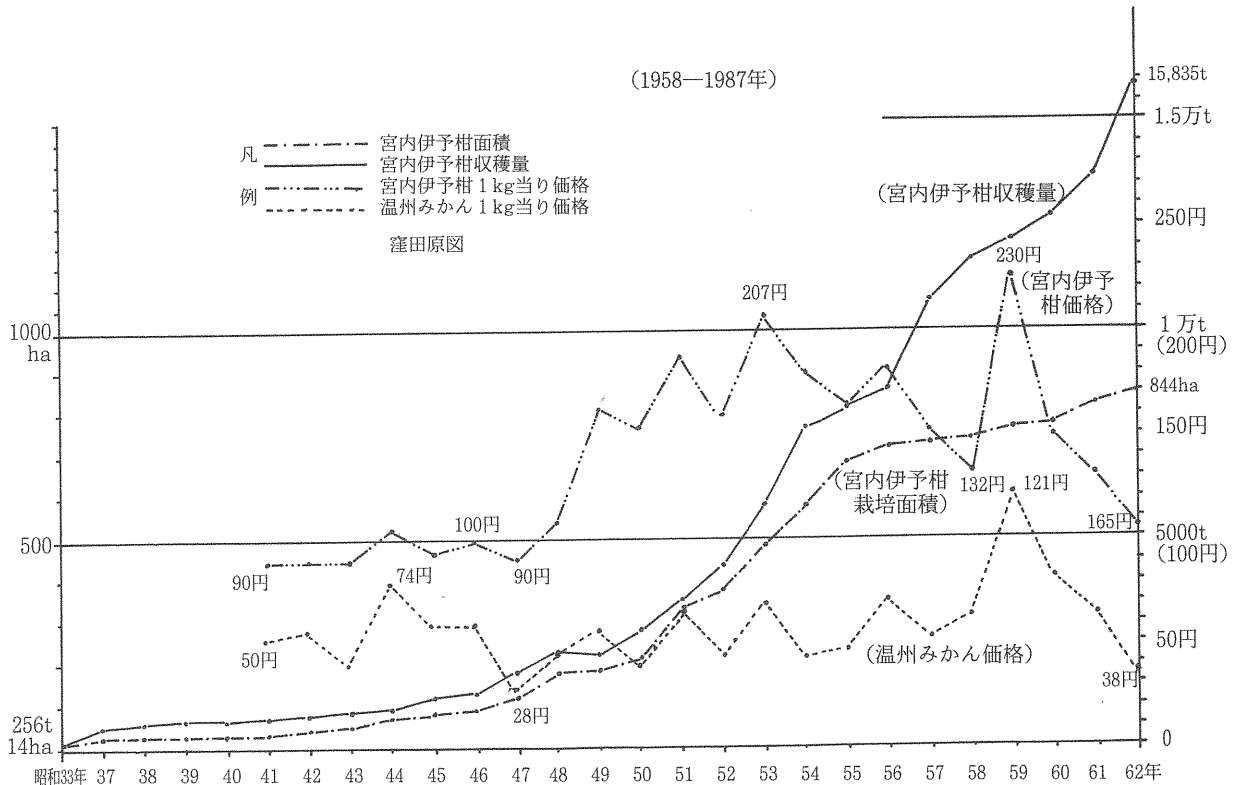
1960（昭和35）年頃、松山市平田町の2戸の農家が秋原夫婦池に宮内伊予柑園を開いて通勤栽培を始め、1967（昭和42）年から結果しはじめた。果色は平田産より若干不良でも、平田に持ち帰って貯蔵すると差がないという（北条市農協浅海支所青果部 1988 p206）。この平田の作出り伊予柑が、地元生産農家の関心を著しく刺激した。

温泉青果農協は、宮内伊予柑の苗木販売許諾権をと

り、苗木の大部分を温泉青果農協を通じて販売することになった。普通伊予柑と区別した荷造り販売を始めて、宮内伊予柑の有利性が価格面でも立証され、消費者の人気も上昇した（第7図）。

温泉青果農協は、1973（昭和48）年春から組織的に管内温州みかんを、大規模な宮内伊予柑への品種更新に着手した。品種更新を宮内伊予柑に的をしぼった理由について、温泉青果農協参事麻野延尚は、(1)温州みかんが安値にかかわらず高価格を維持していること⁶⁾ (2)宮内伊予柑は果実が大きく、収穫能率が上がり生産コストが安いこと⁷⁾ (3)普通伊予柑の適地で主産地形成が可能であったことの3点をあげている（麻野 1979 pp29～31）。

宮内伊予柑原産地の松山市平田町に近接する北条市農協も、1973（昭和48）年以後3～5ヶ年計画で品種更新運動を展開し、農協のイニシアチブに基づいて、北条市からの助成を引き出し事業の推進をはかった。北条市は1,000haの事業対象地域に、2年間1,400万円余の品種更新助成をした。1975～77（昭和50～52）年にかけて、県単独の「晩柑類等産地育成事業」が実施さ



第7図 北条市の宮内伊予柑の栽培面積・収穫量の推移と宮内伊予柑と温州みかんの価格変化（1958-1987年）

資料：愛媛県園芸農蚕課 年次別『果樹統計資料』により、窪田重治作成

れ温州みかんの単一栽培から宮内伊予柑の単一栽培地帯に変貌した（第8表参照）。（写真11・12）

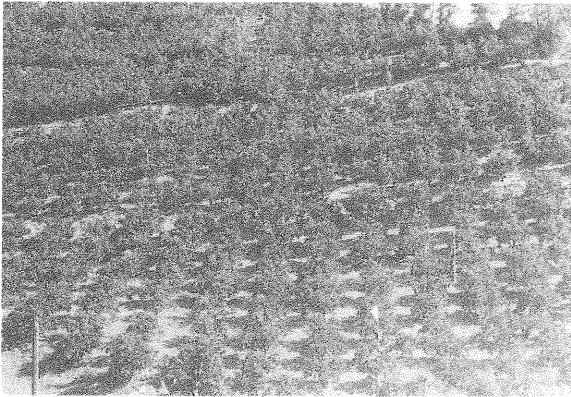


写真11 ブル開墾の山均耕法で造成した宮内伊予柑園。制度資金の運用で農道整備もなされた温州みかんの更新園

北条市萩原 1990年11月11日 窪田重治撮影

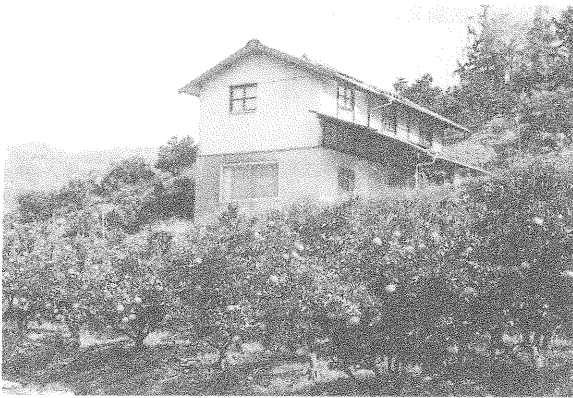
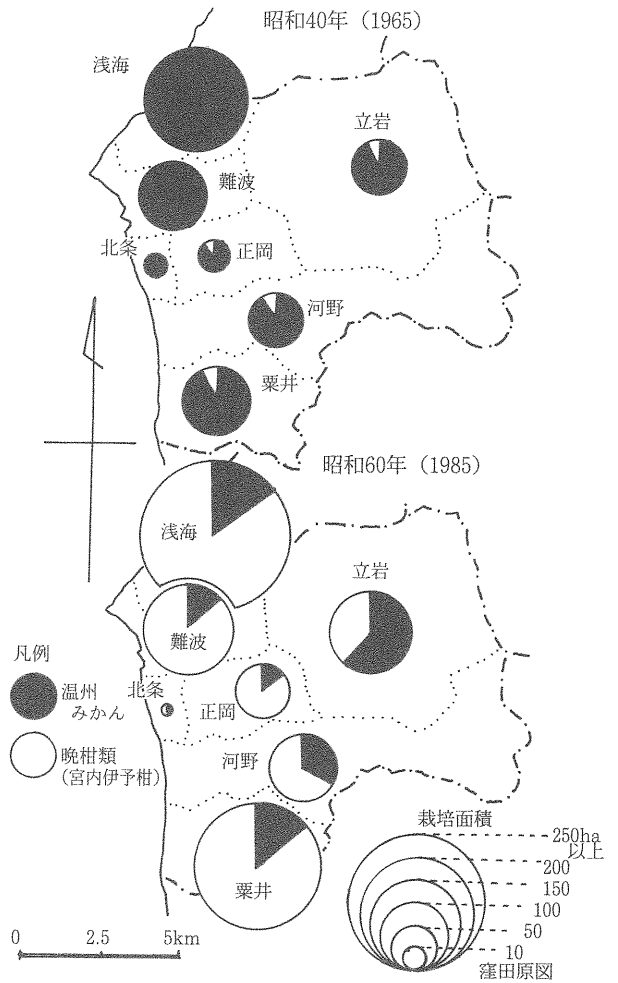


写真12 北条市粟井川上流、平林の宮内伊予柑園と貯蔵庫
1990年11月23日 窪田重治撮影

こうした短期間の品種更新が画一的に達成されたわけではない。温州みかんは適応範囲が広く汎用性があるが、宮内伊予柑は耐寒性が弱く適地範囲が限られ、臨海地域ほど紅の着色も良く糖度も高いのに対し、内陸部は着色が悪く、品質が劣り商品価値が低くなる。立岩地区のように内陸部では、温州みかんが54.7%を占めている地区もある（第8図）

浅海の赤梨で名声を博した北条市の果樹農業は、農業粗生産額24億5,100万円の93.2%を宮内伊予柑が占め、温州みかんは6.8%（1988年）になった。全国の82%（1999年）を生産する愛媛県の伊予柑トップ産地の



第8図 北条市の地区別果樹園面積と温州みかんの推移（1965～85）。

資料：農林省統計調査部 1965・1985農業センサスより、窪田重治作成

松山市や中島町に次ぐ県下第3の地位を確立した。1999年松山市1,509ha(22.5%)、生産量3万2,888 t (25.3%)、中島町871.6ha(13.0%)、生産量2万431 t (15.7%)、北条市793.1ha(11.8%)、生産量2万372 t (15.6%)の順で、県下の三大産地を形成している。

しかし、近年は伊予柑の消費需要の伸び悩みと価格低迷、新品種ヒメポン・清見タンゴールなどと競合し新たな対応が求められている。

一方、柑橘類の生産拡大と価格面での先行き不安などから、代替作物として関心が高まったのがキウイフルーツである（写真13・14）。北条市には1975（昭和50）年粟井に導入され（0.3ha）、栽培が始まり、1977年萩原の田中総一郎が本格的栽培を実施した（第10表）。

1980（昭和55）年北条市農協は、キウイフルーツの

第10表 北条市のキウイフルーツの栽培面積と収穫量の推移 (1982-1999年)

年 次	昭和57年	58年	59年	60年	61年	62年	平成3年	8年	11年
栽培面積	20.4ha	31.6	46.9	63.3	72.2	76ha	83.3ha	33.2ha	27.7ha
収 穫 高	62t	98	335	410	870	1,120.0t	725.0t	632.4t	600.0t

資料：愛媛県農林水産部園芸農蚕課 昭和63年 果樹統計資料ほかにより、窪田重治作成

販売事業を開始した。松山市に次ぐ県下第2のキウイフルーツ産地を形成し、1990（平成2）年には98haで1,500tの生産をあげた。その後、景気の低迷と生産過剰、消費の多様化などの諸要因から栽培面積は減少を続け、1999（平成11）年には27.7haに減じ、松山市（70ha）、長浜町（45ha）、丹原町（40ha）、伊予市（37.3ha）に次ぐ、第5位の産地に落ちている。

6. おわりに

北条市浅海は、先覚者尾上又次郎によって始まった果樹栽培の先進地である。果樹栽培は伝統的に産地間競争意識が強く、産地銘品の優劣を競う品質をめぐる競争は激烈である。

こうした点が、伝統によって培われた経営構造の転換能力にすぐれていて、梨から温州みかん・宮内伊予柑・キウイフルーツの産地形成の展開およびその再編を、スピーディに達成していったといえよう。

この小論を、愛媛大学法文学部教授深石一夫先生の御退官記念論文として献呈させていただきます。

注

- 1) 1878（明治11）年郡区町村編成法によって発足した郡名で、現北条市・中島町、松山市五明の旧12ヶ村が含まれた。1897（明治30）年温泉郡に編入し、公称としての風早郡は消失した。北条平野を風早平野ともいった。
- 2) 浅海梨の衰退要因については、北条市農協浅海支所青果部(1988)：『浅海果樹のあゆみ』249p。窪田重治(1991)：北条市浅海を中心とする浅海梨栽培の盛衰について『伊予史談』282号 pp30～43を参照されたい。
- 3) 仲買人が生産者と立木売・庭売などの方法で直接取引した。生産者は直接現金が入るので、気安く山売に応じ、値崩れの原因となった。
- 4) 当時の日雇労働賃金の約10日分に相当する額。
- 5) 1955（昭和30）年松山市平田町1081番地 宮内義正園で園主が発見した。普通伊予柑（推定樹齢45年生）の芽状異変による枝変わり種で、1966（昭和41）年11月17日種苗名称登録第192号、農林省登録品種認可。発見者に因んで宮内伊予柑と命名、豊産早熟性品種。
- 6) 1972（昭和47）年産温州みかん1kg当り28円、伊予柑90円（愛媛県果樹統計資料）。
- 7) みかん1個平均重量100g、1日1人当り採取量300～400kg、宮内伊予柑1個平均重量250g、1日1人当り採取量800～1,000kg。

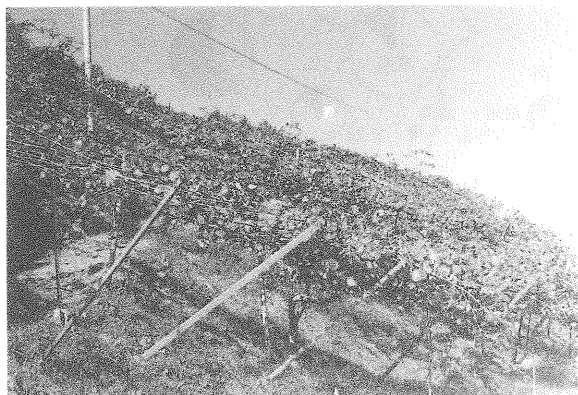


写真13 温州みかん園の転作によるキウイフルーツ園
(ヘイワード種)
北条市萩原 1990年11月11日 窪田重治撮影



写真14 粟井川上流の谷田の転作によるキウイフルーツ
(ヘイワード種) 園と山地斜面の宮内伊予柑園
北条市客 1990年11月23日 窪田重治撮影

参 考 文 献

- 相原和夫（1985）：柑橘農業の経営特性と構造再編
『農林業問題研究』第81号 第21巻 第4号 富民協
会 pp12～22
- 相原和夫（1990）：『柑橘農業の展開と再編』 時潮社
218p
- 阿川一美（1988）：『果樹農業の発展と青果農協』
財団法人果樹振興桐野基金 607p
- 麻野尚延（1979）：温泉青果農協の伊予柑主産地形成
『農業と経済』45巻11号 富民協会 pp25～35
- 麻野尚延（1985）：果樹産地再編の基本戦略『農林業問
題研究』第81号（第21巻第4号） 富民協会
pp30～41
- 伊予果物同業組合（1932）：『伊予のくだもの』 67p
- 伊予果物同業組合（1932）：『第5回連合販売協議会議案』
40p
- 伊予果物同業組合（1933）：『第6回連合販売協議会議案』
40p
- 伊予果物同業組合（1936）：『第9回生産販売連合協議会
書類』 46p
- 伊予果物同業組合（1938）：『第11回生産販売連合協議会
書類』 43p
- 温泉青果農協（1966）：伊予柑新品種誕生（グラビア）
『伊予路乃園芸』第22巻 第1号 pp2～6
- 桐野忠兵衛編（1968）：『愛媛県果樹園芸史』 愛媛県青果
農協連合会 1104p
- 窪田重治（1986）：伊予柑栽培に関する地理学的研究
『伊予史談』 260号 伊予史談会 pp40～59
- 窪田重治（1990）：『愛媛の果樹産地の形成とその変容』
青葉図書 338p
- 窪田重治（1991）：北条市浅海を中心とする浅海梨栽培の
盛衰について『伊予史談』 282号 伊予史談会 pp30
～43
- 窪田重治（1992）：北条平野山麓地帯の柑橘産地の形成と
変容『伊予史談』 286号 伊予史談会 pp15～27
- 窪田重治（1997）：愛媛の温州みかん産地再編の動向と地
域的特性『愛媛の地理』 第13号 愛媛地理学会
pp34～51
- 豊田達雄（1984）：北条（風早）平野の果樹栽培
『愛媛県史地誌Ⅱ 中予』 愛媛県 pp503～510
- 北条市誌編纂会（1981）：『北条市誌』 北条市 1422p
- 北条市農協浅海支所青果部（1988）：『浅海果樹のあゆみ』
249p
- 村上節太郎（1951）：愛媛県果樹栽培地域の地理学的研究
(1)『愛媛大学紀要』 第4部 社会科学
第1巻 第2号 愛媛大学 pp65～94
- 村上節太郎（1952）：愛媛県果樹栽培地域の地理学的研究
(2)『愛媛大学紀要』 第4部 社会科学
第1巻 第3号 愛媛大学 pp237～260
- 村上節太郎（1964）：伊予柑の由来と栽培地域『伊予史
談』 171号 伊予史談会 pp67～73
- 村上節太郎（1967）：『柑橘栽培地域の研究』 松山市南町
2-2-30 1089p
- 矢野貞義（1978）：『愛媛の青果と共に歩いて七十年』 松
山青果KK 329p